

A年復活前主日 マタイ27章1―54節

【直訳】

- 32 だが出て行きつつ 彼らは見つけた キレネの人を 名前は シモン、  
この人に 彼らは強制した ようにと 彼が運ぶ 彼の十字架を。
- 33 そして 来て 場所へ 言われる ゴルゴタと、  
それはある されこうべの 場所と 言われて、
- 34 彼らは与えた 彼に 飲むことを ぶどう酒を 苦みが混ぜられた。  
そして なめて 彼は望まなかった 飲むことを。
- 35 だが十字架につけて 彼を、  
彼らは分けた 彼の衣服を、 投げて くじを、
- 36 そして 坐って 彼らに見張っていた 彼を そこで。
- 37 そして 彼らは掲げた 彼の頭の上に 彼の罪状を 書かれている、  
「これは ある イエスで 王 ユダヤ人たちの」。
- 38 その時 十字架につけられる 彼と共に 二人の 盗賊たちが、  
一人は 右に そして 一人は 左に。
- 39 だが傍らを通る者たちは 冒瀆していた 彼を 振りつつ 彼らの頭を  
40 そして 言いつつ、  
「壊す者 神殿を そして 三日で 建てる者、  
お前は救え 自身を、  
もし 子で お前があるなら 神の、  
「そして」お前は降りよ 十字架から」
- 41 同様に 祭司長たちも 馬鹿にしつつ 律法学者たちや長老たちと共に 言っていた、  
42 「他の者たちを 彼は救った、  
自身を 彼はできない 救うことが、  
王で イスラエルの 彼はある、  
彼は降りよ 今 十字架から、  
そして 私たちは信じるであろう 彼を。
- 43 彼は信頼した 神を、  
彼は救出せよ 今、 もし 彼が望むなら 彼を。  
なぜなら彼は言った 次のことを 『神の 私はある 子で』」
- 44 だが同じく 盗賊たちも 共に十字架につけられた 彼と共に 罵倒していた 彼を。
- 45 だが第六時から 闇が 起こった 全地の上に 第九時まで。  
46 だが第九時頃 叫び声をあげた イエスは 声で 大きな 言いつつ、  
「エリ エリ レマ サバクタニ」。  
これは である、「私の神よ、私の神よ、なぜ 私を あなたは見捨てたか」。

47 だがある者たちが そこに立っていた者たちの 聞いて 言っていた 次のことを  
「エリヤを 呼ぶ この者は」。

48 そして すぐに 走って 一人が 彼らのうちの

そして 取って 海綿を 満たして また酢で そして 巻きつけて 葦に  
飲ませた 彼に。

49 だがその他の者たちは 言っていた、

「そのままにせよ 私たちは見よう 来るかどうか エリヤが 救うために 彼を」。

50 だがイエスは 再び 叫んで 声で 大きな 行かせた 霊を。

51 そして 見よ 幕が 神殿の 裂かれた 上から 下まで 二つに

そして 地が 揺らされた そして 岩が 裂かれた、

52 そして 墓が 開かれた

そして 多くの 体が 眠っていた 聖なる人々の 起こされた、

53 そして 出て来て 墓から 彼の復活の後に

彼らは入った 聖なる都の中へ そして 彼らは現われた 多くの人々に。

54 だが百人隊長は そして 彼と共に 見張っていた者たちは イエスを

見て 地震を そして 起こったことを

恐れた 非常に、 言いつつ

「真に 神の 子で あった この人は」。

〔新共同訳〕

32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。 33 そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、 34 苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。

35 彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、 36 そこに座って見張りをしていた。 37 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。 38 折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。 39 そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、 40 言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」 41 同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。 42 「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。 43 神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」 44 一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。 46 三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。 47 そこに居合わせた人々のうちには、これを聞

いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48 そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。49 ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう」と言った。50 しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。51 そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真つ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、52 墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。53 そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。54 百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

### ①構成

#### ① 第一段落 (32―38 節)

⑦ 並行箇所のマルコ 15 章 25 節は「イエスを十字架につけたのは、午前九時であった」と述べている。しかし、マタイは 36 節でこの時間には触れず、兵士たちが座って「見張っていた」と述べている。この「見張る」という語は結びの 54 節にも用いられている。今はイエスを蔑んでいる彼らが、百人隊長と共にイエスを「神の子」と告白するようになる。

① ピラトがイエスに「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問したとき、イエスは「それは、あなたが言っていることです」と答えた (マタ二七 11)。イエスは確かに「王」であるが、ピラトたちが考えるような、自分の思いのままに権力を振るうこの世の王ではない。イエスが神の思いを実現させるために働く王であることを、ピラトもローマの兵士たちも理解できない。罪状書きに記された「ユダヤ人たちの王」という称号に表されているように、この段落にはローマの人々の無理解が示されている。

#### ② 第二段落 (39―44 節)

⑦ この段落には三つのグループの人々が登場する。最初に、十字架の「傍らを通る者たち」がイエスを「冒瀆」する。彼らは荒野で悪魔が試みたときと同様に、「もしお前が神の子であるなら」と言い、イエスに向かって「お前は十字架から降りよ」と要求する。次に現れる祭司長たちも「同様に馬鹿にして」、律法学者や長老たちと一緒に言う。彼らは「お前は降りよ」とは言わず、「彼は降りよ」と言って、イエスを相手にもしない。最高法院でイエスを死刑にすることを決めた彼らは、十字架から降りることができず、神も助けに來ないイエスは「イスラエルの王」でも、「神の子」でもないことを確認しようとしている。最後に、イエスと一緒に十字架につけられている盗賊たちも「同じく」、イエスが神の子であるとは思えず、「罵倒」する。

#### ③ 第三段落 (45―50 節)

⑦ 沈黙を続けたイエスは最期に「なぜ」と叫んで、苦しみに対する神の答えを求める。46 節の「イエスは大きな声で叫び声をあげた」と 50 節の「イエスは再び大きな声で叫んで」が対応しており、囲い込みを形作っている。

① 二度のイエスの叫びの間に人々の反応が描かれる。人々はイエスの「エリ、エリ」という叫びはエリヤを呼ぶ声だと思ひ込み、エリヤがイエスを救うかどうかを見ようとする。

④ 第四段落（51―54節）

⑦ イエスが息を引き取ると、神殿の幕は「裂かれ」、地は「揺らされ」、岩は「裂かれ」、墓は「開かれ」、聖者の遺体は「起こされ」る。これらが神的受動態であれば、人間の業を超える出来事に神の答えが示されていることになる。神殿の幕のほかは、終末に起こると期待されていたしるしである。

① 百人隊長と共にイエスを「見張っていた者たち」も、イエスを「神の子」と告白する。ユダヤ人よりも先に、異邦人の彼らがイエスを信じるようになることを述べることによって、マタイはユダヤ人の頑なさに警告を与えようとする。

② ユダヤ人の王（32―38節）

① キレネは、エジプトの西に位置し、大スルテス湾の東にある半島キュレナイケの首都。キレネの人シモンはこの地のユダヤ人ディアスポラであり、過越祭のためにエルサレムにやって来た人物と思われる。ディアスポラはギリシア語で「散らされている者」を意味し、パレスチナ以外の地に移住しているユダヤ人やその居住地を指す術語。

② 「ゴルゴタ」は「頭蓋骨」を意味するアラム語をギリシア語に音写した語。マタイはこれを「されこうべの場所」と訳している（マコ一五22、ヨハ一九17も同様）が、ルカ23章33節は「ゴルゴタ」という語を用いず、「されこうべ」とだけ述べている。それをウルガータが「カルヴァリア」というラテン語に訳した。「カルヴァリ」はこれに由来する。

③ 受刑者の苦しみを和らげるために、苦みを混ぜたぶどう酒を差し出す習慣がユダヤにはあった（箴三一6）。しかし、受難のイエスは、詩編69編22節「人はわたしに苦いものを食べさせよう」とし、渴くわたしに酔を飲ませよう」との表現と理解されている。48節の「酔」を参照。④ 兵隊が役得として受刑者の衣類をはぎ取ることも当時の習慣であった。しかし、やはりここにも詩編22編19節の実現を見て、イエスを詩編の語る「苦難を受ける義人」にあてはめている。

⑤ マタイ2章1節以下では、イエスは異邦人（占星術の博士）から「ユダヤ人の王」として礼拝された。しかし、ここではイエスはユダヤ人によって死に追いやられ、その罪状が「ユダヤ人の王」と書かれる。「ユダヤ人の王」という罪状は、ローマ当局がイエスを政治的な転覆の首謀者と見なしたことを示している。弟子にさえ見放されたイエスがなぜ「王」なのか分からない兵士たちは、イエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱し、唾を吐きかけた（二七27―31）。イエスは前夜から最高法院で裁判にかけられ、ピラトの審問の後には鞭打ちも受けている（二六57―二七26）。このとき、イエスには自分の死刑台となる十字架を背負う力も残っていない。兵士たちの目に映っているイエスは盗賊に囲まれて十字架につけられる、力のない死刑囚でしかない。

③ 十字架から降りよ（39―44節）

① 「頭を振る」という動作は侮辱を意味する。頭を振って嘲笑うという表現は、詩編22編8節を思い起こさせる。

② 人々は「もしお前が神の子であるなら、十字架から降りよ」と言う。荒れ野でイエスが四十日間断食したとき、悪魔も同じように挑発した（マタイ4章）。十字架のそばを通る人々は、十字架

から降りることのできる者が神の子だと考えている。

◎イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と書かれている。「ユダヤ人」は一つの国民としてのユダヤ人を意味する政治的概念であるが、「イスラエル」は神に呼び出された民を表す宗教的概念である。従って、種族としてユダヤ人に属しても、必ずしも「イスラエル」に属するとは限らない。罪状書きの「ユダヤ人の王」はイエスを政治的視点から侮蔑する称号であり、祭司長や律法学者や長老たちは、十字架から降りることのできない、そして神が救いに来ないイエスを侮蔑して「イスラエルの王」と呼んでいる。

④「彼は神を信頼した……」（43節）は詩編22編9節に基づいている。並行箇所マルコ15章32節、ルカ23章35節には、43節にあたる言葉はない。

◎十字架のそばを通るユダヤ人たちは、イエスが「神の子」であるとは思えず、冒瀆する。彼らにとつて神の子とは、十字架から降りて自分を救うことのできる者のはずだからである。祭司長たちも、またイエスと一緒に十字架につけられている強盗たちも同じことを考えている。彼らにとつては、神を信頼したのに、神が救いに来ないイエスは「イスラエルの王」でも「神の子」でもない。

#### ④イエスは大きな声で叫び声をあげた（45―50節）

① 当時は、午前六時から午後六時を十二時間に区分して時を計っていた。「第六時」は昼頃、「第九時」は午後三時頃にあたる。午後三時頃、イエスは大きな声で叫び声をあげた。

② 「エリ エリ…」は詩編22編2節の引用。マルコ15章34節の「エロイ エロイ」はアラム語の直訳。マタイは、「エリヤ」と聞き違える者がいたことに合わせて、ヘブライ語形に近づけ、「エリ」に変えている。エリヤは、終末にメシアに先駆けて現れると期待されていた預言者である（マタイ一七3・10―12）。

◎ピラトの審問に答えた後、イエスは沈黙を続けた。死刑の判決を受けても、兵士から侮辱されても、十字架の上で罵られても、沈黙を続けたイエスは、息を引き取る直前、「なぜ」と叫ぶ。神を信頼し、苦しみを受け続けたイエスは、この苦しみに対する神の答えを求めて叫ぶ。

③ 祭司長たちはイエスが「神を信頼した」ことは認めた。しかし、信頼に対する神の答えはイエスを十字架から降ろすことだと思ひ込んでいる。苦しみを除くことが「救い」だと考える人々には、「エリ エリ」と叫ぶイエスの声は、エリヤを呼ぶ声に聞こえてしまう。エリヤはユダヤ人の間で、苦しむ者を助けると信じられていた預言者である。人々はエリヤを見ようとするが、現れない。

#### ⑤この人は神の子（51―54節）

① 51節から52節には、「裂かれた」、「揺らされた」、「裂かれた」、「開かれた」、「起こされた」というように受動態が続いている。これらを神的受動態と見るなら、「神がイエスを望むなら、神はイエスを救出せよ」と言う祭司長たちの言葉に対する答えとなる。宗教的指導者たちは神がイエスを十字架から降ろすことを救いと考えているが、神は十字架に死んだイエスをご自分の思いに合う者であることを人間の業を超えるこれらの出来事によって明らかにする。

② 神はイエスを十字架から降ろしはしなかった。イエスは死なない神の子ではなく、死んで復活す

る神の子である。マタイは、52節で聖者の復活を、53節でイエスの復活後の聖者の聖都への帰還を述べている。イエスの復活よりも早く聖者の復活に触れるのは、イエスの復活が確実で、自明の事実だからである。

### ⑥今は見えない救いを信じて

① イエスを刑場へ引いて行き、十字架につけた兵士たちはイエスを見張っていた。しかし、やがて彼らが百人隊長と共にイエスを「神の子」と告白する者となる。「神の子なら」という関心すら持たなかった異邦人が、イエスを「神の子」と告白する。一方、「神の子なら、十字架から降りるはず」という自分たちの考えに固執するユダヤ人は、神が起こした出来事に示された神の答えを聞き逃してしまう。人間の思いを打ち砕く神の力を恐れることが、神からの救いにあずかる第一歩なのである。

② 39―44節に登場する人物は、「十字架から降りることが救い」であると考えている。彼らにとって自分を救えないイエスは「神の子」ではなく、「神が望む者」ではない。「神が彼を望むなら、今神はイエスを救出せよ」と語るユダヤ教指導者たちに対して、神の答えが語られるのが、51―54節である。ここでは、マルコ福音書と比べると、繰り返し神の介入が描かれている。十字架の上で死んだイエスは確かに「神が望む者」であり、神の御心を現した者であることが明らかにされる。

③ 「神が起こした出来事」を見て、百人隊長と見張りの者たちは「真に、この人は神の子であった」と告白する。このような描写によって、孤独の中でも神を最後まで信じて生きたイエスが、「神が望む神の子」であるという力強いメッセージが語られる。十字架のイエスを挟んで、「十字架から降りることが救い」と考える人々と、苦しみの中で叫びを上げて息を引き取ったイエスこそが「神の子」であると告げる神とが対立する。

④ 苦しみを逃れることが救いと考える人々にとっては、イエスの叫びは絶望や神への恨みごとのように聞こえているはずである。しかし、イエスの叫びは、「苦しむ者の叫びを神は聞き届ける」という信仰からくる叫びである。だからこそ神は、最後まで神に助けを求めて叫んだイエスを「神の子」と認める。

⑤ イエスは「なぜ、あなたは私を見捨てたのか」と言わざるをえない苦しみが確かにあることを、そしてその苦しみの答えが見えないことを神に訴えている。それは、人間には与えることのできない答えを神が与えてくれるという信頼から起こる叫びである。

⑥ 苦しみを逃れることではなく、苦しみを越えて与えられる救いがあることを神はイエスの復活を通して知らせる。それは、人が自分では生きる力をすべて失ったときにも、神の力によって起こされて生きるいのちである。その復活のいのちに出会うためには、「十字架から降りることが救い」という考えから離れて、神の力を信頼し、今は見えない答えを求め続ける生き方へと向かわなければならない。

⑦ 神に叫ぶこと、それは自分には見えない救いがあることを信じていることだと、聖書は教えている。神が与える救いは確かであると信じていることは、将来救いにあずかることのできる喜びを今の生活に現すという生き方となる。十字架で神に叫ぶイエスは、苦しみが真の救いへと続いていくことを信じて生きるようにと呼びかけている。